

# 学会報告

## 第15回国際社会学会大会・ 農業食料社会学分科会(ISA-RC40)

立川 雅司

2002年7月に豪州・ブリスベーン市で開催された国際社会学会大会のうち、農業食料社会学分科会に参加した。大会の分科会は全体で60余り、各分科会は約1週間セッションを続けるというもので、学会全体の俯瞰はとてできないので、ここでは筆者が参加・報告した農業食料社会学分科会(RC40)について述べる。

農業・農村・食料に関連する社会学関連の国際的学会としては、世界農村社会学会(IRSA)があり4年毎のオリンピック年に開催されている(次回は2004年ノルウェー)が、この国際社会学会は、その中間年にやはり4年毎に開催される(次回は2006年南アフリカ)。IRSAが農村社会学関連分野も含めた包括的な研究大会であるのに対して、今回のRC40は、社会学の中でも農業や食料にテーマを限定した研究会である。どちらかといえば、米英など英語圏を中心として活動している「農業食料社会学(Sociology of Agriculture and Food)」といわれる批判的研究スタンスをとる研究者の発表の場という性格が強い。アメリカの農業経済学が数理経済学にディシプリンの重心を移す中で、マクロ的な政治経済的分析や社会全体にもたらす影響に関する分析は、むしろ農村社会学が担うという構図が1980年以降顕著になってきたが、そうした傾向の中で形成された研究グループが自己定義として採用した名称が農業食料社会学である。従って、農業経済学分野との関連性も比較的高いと感じられるのも当然のことといえよう。今回の分科会テーマも、農業の持続性、食料安全保障、バイオテクノロジー、有機農業、食品規格・品質、国際的農業危機など、現代的なトピックを柱立てにしたセッ

ション構成となっており、日本の農業経済学分野の研究者から見ても興味深いものといえよう(日本からも農業経済学研究者の参加があった)。

興味を引いた研究報告をトピック的に挙げるならば、使い捨てカメラを用いた農村居住者自身の景観評価とその分析(手法としての面白さ)、有機農業のグローバルビジネス化とその「非」持続性、バイオテクノロジーに関するメディア報道に関する言説分析、インターネット接続による地域内ソーシャル・キャピタルの向上効果、多国化と世界調達が進む食料体制に関する把握方法、等々が挙げられよう。なお、今回出席して驚いたのは、こうした国際学会で報告される研究が依拠する理論的ベースが、予想以上に共通化している点である。例えば、アクターネットワーク論などは、報告者の国籍を問わず盛んに引用されている。文化的なグローバル化や研究者間の共通言語に通暁することが、アカデミックな面でのモノカルチャー化を招かないよう自戒としたい。

このRC40は、独自に研究雑誌(International Journal of Sociology of Agriculture and Food)を公刊(年1回)してきたが、今大会を契機として、これを全面的に電子ジャーナル化した。以下のサイトにアクセスすれば、全文を読むことができるので、この分野についてご関心の向きには、是非、1度アクセスされたい。

なお、RC40に設置されている運営委員会(4名で構成)のひとりには、秋田県立大学の谷口吉光助教授が選出されているように、日本においてもこの分野での研究が展開されつつある。また研究分野自体としては萌芽的なものともいえようが、日本での研究活動に関しては、以下のサイトを参照されたい。

参考ホームページ：

農業食料社会学に関する電子ジャーナル  
<http://www.isrd.cqu.edu.au/isrd/IJSAF/index.htm>

日本での農業食料社会学研究会  
<http://homepage2.nifty.com/yoheidoi/rsaf/index.htm>